

平成三十年度入学試験

一般方式試験問題

国語

注意

- 一、開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
- 二、受験番号を解答用紙の二カ所¹に書き、答えはすべて**解答用紙**に書きなさい。
- 三、問題は**1**から**3**までで、五ページにわたって印刷してあります。
なお、問題用紙のほかに別紙があり、表に**別紙1**、裏に**別紙2**が印刷されています。
- 四、終了のチャイムが鳴ったら、すぐに筆記用具を置きなさい。

1 次の各問いに答えなさい。

問1 線のカタカナを漢字に直しなさい。送りが必要な場合は、それをひらがなで書きなさい。

(1) 母の健康がカイフクした。

(2) 知っていることがゼンテイだ。

(3) 火に油をソング。

(4) 本をシュツパンする。

(5) セイゲン速度を守る。

問2 線の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

(1) 技術を伝承する。

(2) 健やかな成長を願う。

(3) お湯を冷ます。

(4) 漁師の仕事をする。

(5) 君には一切関係ない。

2 別紙1の文章を読んで後の問いに答えなさい。

問1 (A) (B) (C) にあてはまる言葉を次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

ア では イ たとえば ウ つまり エ さらに オ しかし

問2 線(1)「ここに農業と工業のちがいがあある」とありますが、農業と工業はどのようちがいますか。本文から読み取って三十五字以内で説明しなさい。

問3 図1.1を見て、a・bにあてはまる数字を次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

ア 五五〇五九 イ 六〇〇六四 ウ 六五〇六九 エ 七〇〇七四

問4 線(2)「そうした状況」とありますが、それはどのようなことを表していますか。適当なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 農業従事者の年齢層が上がり、若い人の農業への参入が期待されており、農業にはビジネスチャンスがあるということ。
イ 農業従事者の年齢層が上がり、高齢者でも元気で働いている人が多いため、農業には明るい予兆が見られるということ。
ウ 農業従事者の年齢層が下がり、若い人の農業への参入が増えており、農業は働きやすい仕事になっているということ。
エ 農業従事者の年齢層が下がり、高齢者が若い人とともに働けるため、農業ではエリート候補が育っているということ。

問5 線(3)「最近の大きな変化」とありますが、その変化について具体的に書かれている一文を本文中からぬき出し、初めの五字を答えなさい。

問6 図1.3を見て、c・dにあてはまる言葉を次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

ア 自然災害でつぶれていく耕地 イ 耕作放棄でつぶれていく耕地
ウ 工場や宅地にまわる面積 エ 植林や農林道などにまわる面積

問7 線(4)「耕作放棄地」とありますが、なぜ放棄してしまうのですか。その理由を説明しなさい。

問 8 にあてはまる言葉を漢字二字で答えなさい。

問 9 ———— 線(5) 「光の部分」とありますが、この場合「光」とはどういうことを表していますか。わかりやすく答えなさい。

問 10 ———— 線(6) 「耕地利用率が一九九四年に一〇〇を切り、以後一貫して下がってきました」とありますが、その理由として適当なものを次の中から二つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 耕作放棄が進んで農地が工場や宅地に転用されたから。
- イ 働く人が高齢化して多くの種類を作れなくなったから。
- ウ 農地が減少して作付け面積が減ってしまったから。
- エ 作業効率を上げるために作物の種類を減らしたから。
- オ 若い農業従事者の離職率が上昇したから。

問 11 ———— 線(7) 「一喜一憂」のように、次のA～Cの四字熟語のに、それぞれ漢数字をあてはめなさい。

- A 石鳥
- B 転起
- C 客来

3 別紙2の文章を読んで後の問いに答えなさい

問1 —— 線(1) 「離れるやいなや」とありますが、「くやいなや」の使い方が本文とは異なるものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 海に釣り糸を垂らすやいなや大きな魚が釣れた。

イ 急いでドアを開けるやいなや大きな猫が飛び込んできた。

ウ 彼がこの事件の犯人やいなやと迷ってしまった。

エ 食卓しょくたくからあげを出すやいなやあつという間になくなった。

問2 —— 線(2) 「あの子が来た形跡」とありますが、どのような形跡ですか。具体的に答えなさい。

問3 —— 線(3) 「夕子は決心をした」とありますが、夕子は何を決心したのですか。「くこと」に続くように本文中から九字でぬき出しなさい。

問4 —— 線(4) 「あの子の顔を思い浮かべる」とありますが、夕子が思い浮かべるのはあの子のどのような顔ですか。本文中から二十字以内でぬき出して答えなさい。

問5 —— 線(5) 「あの子と親しくなったような気がした」とありますが、それはなぜですか。その理由として適当なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア あの子の手帳だけでなくお金を自分があずかっているから。

イ 手帳やお金をあの子のところまで届けに行くことができるから。

ウ 手帳を見ることであの子を知ることができたと感じたから。

エ あの子の代わりに猫に餌をやることが習慣しゅうかんになっているから。

問6 —— 線(6) 「すぐに出かければ、お母さんが帰ってくる七時までには楽に行って帰れるはずだった」とありますが、なぜ七時までに帰らなければいけないのですか。その理由がわかる箇所を「くだから」に続くように本文中から八字でぬき出して答えなさい。

問7 A C にあてはまる言葉を次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。ただし、記号は一度しか使えません。

ア だらだら イ もぞもぞ ウ ずるずる エ ぐいぐい オ ぐらぐら

問8 —— 線(7) 「愛はむすつとした顔をして返事はしなかった」とありますが、このときの愛の気持ちとして適当でないものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア お尻が痛くて足もだるいので早く帰りたいという気持ち。
イ お留守番すると言ったのにさせてもらえず不満に思う気持ち。
ウ 行きたくないのに連れて行かれるのはいやだという気持ち。
エ 夕子の言うようにはこれ以上じつとがまんできないという気持ち。

問9 —— 線(8) 「なんだかさつきよりもさらにペダルは重くなったような気がした」とありますが、それはなぜですか。その理由として適当なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 団地までの道のりがまだまだ遠いから。 イ 七時までに帰ろうと急いでいるから。
ウ 愛が文句ばかり言って邪魔じやまをするから。 エ 愛が思っていた以上に重かったから。

問10 この文章の説明として適当なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 姉の行動をことごとく邪魔しようとする妹の存在によって、妹を世話する夕子の苦労を読者に伝えようとしている。
イ 一度会ったことがあるだけの男の子の存在が、猫の餌やりをめぐる問題で離れかけていた姉妹の心を結びつける働きをしている。
ウ 男の子が落とした手帳を、わざと自分のものにした様子を描くことで、夕子の男の子への好意を読者にわかりやすく示している。
エ だだをこねる妹をなだめる様子を描くことで、なんとかして男の子に手帳を届けたいという夕子の思いを際立たせている。

問11 本文から、夕子と愛はどのような姉妹だと読み取ることができますか。そのように読み取ることができる理由を示した上で、八〇字から一〇〇字で書きなさい。

これで問題は終わりです。

別紙1（本文は、設問の都合で省略した箇所があります。）

まず生産基盤を中心に日本農業の「いま」をさぐってみます。農業の生産基盤には次の三つがあります。①農業で働く人（労働力）、②土地、③土、です。

ここで土地と土を別々にあげたのを、「なんだ同じじゃないか」と奇異に感じる人がいるかもしれません。たしかに工業や商業では工場や店を建てる土地さえあれば土は関係ありません。土はむしろ邪魔で、コンクリートで覆ってしまいます。（A）農業では、土地があればいいというものではありません。その土地の中にある土が豊かかどうかで（土が豊かとはどういうことかについては第5章で述べます）、そこでとれる作物の収量もおいしさも、さらには食べる人にとってもっとも大切な「安心して食べられる」かどうかということも、まるでちがってきます。ある意味では、農業にとって土はもっとも大切な生産基盤といえます。(1)ここに農業と工業のちがいがあるので。

さて、人についてみます。図1-1は農業従事者の年齢構成を、一九九〇年、一九九五年、二〇〇〇年と五年きざみで、その推移を

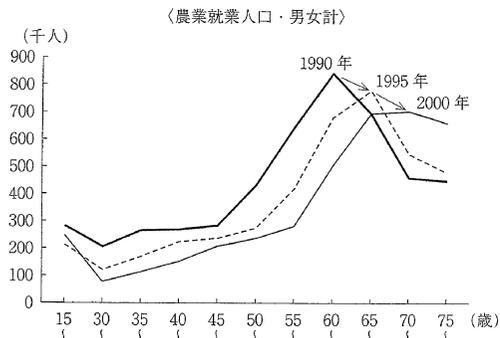


図1-1 年齢階層別にみた農業労働力の推移(販売農家)
出典：農林水産省『食料・農業・農村白書』(2000年度)

追いつながらみただけのものです。これをみると、いま農業で働いている人の年齢層のピークは、一九九〇年には「a」歳だったものが、年を追うごとに上がり、二〇〇〇年には「b」歳になっていきます。いまは七〇歳を過ぎてても元気で働いている人は多いのですが、それにしてこの年代の方に国民への食料供給責任を背負わすのは酷(こく)というものでしょう。若い世代の農業参入が期待されるゆえんです。考えようによっては、農業ほどビジネスチャンスがある仕事はないのではないかと思います。

(2) そうした状況を反映しているのでしょうか。農業をめぐる人の動きに、いま少しずつ変化が出てきています。ひとところにくれば、農業をやるという人が増えてきているのです。一九九〇年、中学や高校、大学を出てすぐ農業につく新規学卒就農者は一八〇〇人、これに他の職場をやめて農業についた三九歳以下の青年を加えても、新規就農青年は四三〇〇人ほどでした。当時、国家試験をパスして新しく医者になる人は年に八〇〇人ほどで、医者になるより農業につく人が少ないのだから、農業者は将来のエリート候補だというジョークが、農村でささやかれていたほどです。

一〇年後の二〇〇〇年、新規学卒就農者は二一〇〇人に増え、それに三九歳以下の離職就農者を加えた新規就農青年は一万一六〇〇人に増えました。日本では従来、農業につくのは農家の子弟というのが当たり前でしたが、いまでは農家ではない家に生まれ育った青年たちが、新規就農者の中でかなりの割合を占めるようになっていきます。これも(3)最近の大きな変化です。ここに農業の明るい予兆をみることができそうですが、しかし全体的には、図1-1でみたように農業従事者の高齢化は日々進んでいます。(中略)

人は年をとると、どうしても若いときと同じようには働けません。そこで経営規模を少しずつ小さくしていくことになります。図1-3は、耕地がつぶれていくようす(潰廃)を要因別にみたものです。九〇年代半ばから、cより、dのほうが多くなっています。農業で働く人が年をとり、しだいに働けなくなっている結果が、ここに出ています。ちなみに(4)耕作放棄地とは「一年以上耕作されておらず、今後数年の間に再び耕作する意志が見られない土地」をいいます。

日本の農地面積は一九六一年には六〇八万六〇〇〇ヘクタールありました。日本の国土面積のおよそ一六%に相当します。六〇年代、七〇年代とつづいた経済成長のなかで農地は工場や宅地にどんどん転換され、二〇〇一年には四七九万四〇〇〇ヘクタールと、一二九万二〇〇〇ヘクタールも減ってしまいました。一二九万ヘクタールといえば、青森岩手、秋田、宮城、山形、福島、東北六県に茨城、栃木、群馬という北関東三県を加えた農地面積にほぼ匹敵します。いずれも農業が盛んな県ばかりです。そしていま、この農地の減少の原因が、工場や宅地化といったe要因から、高齢化による耕作の放棄という農業内部の問題に変わってきているのです。

農林水産省は一九九九年に制定された食料・農業・農村基本法(第3章3節でくわしくみます)の準備過程で、これからの農業についてさまざまな予測を立てました。そのひとつに農地面積の見通しがあります。それをみますと、二〇一〇年には日本の農地面積は三九六万ヘクタールと、あと一〇〇万ヘクタール減り、そのうち七九万ヘクタール、(B)八〇%は耕作放棄が原因になるとしています。こうして、人につづいて土地という農業の大切な生産基盤も、しだいに失われてきているのです。農林水産省がこの予測を発表したのは一九九八年ですが、その後の動きをみると、ほぼこれにそって事態が推移していることがわかります。

(C) 農地利用をめぐる(5) 光の部分はないのか。農業者が農地をいかに有効に利用しているかをみる*指標に、耕地利用率という数字があります。気候が変化に富み、水にもめぐまれた日本では土地に作物をつぎつぎと作付けし、土地を回転させて利用するやり方が広く行なわれていました。その場合、当然耕地利用率は一〇〇%を超えます。しかし、作業効率をあげるために、つくる作物の種類を少なくしぼるやり方が広く行なわれるようになり、

それにくる人が年をとっているいろいろなものをつくることのできなくなったこともあって、この(6)耕地利用率が一九九四年に一〇〇%を切り、以後一貫して下がってきました。それが九九年になって前年の九四・一%を〇・三ポイント上回る九四・四%となり、二〇〇〇年には九四・五%と、さらに〇・一ポイント上昇したのです。農林水産省は二〇〇〇年度の『食料・農業・農村白書』(食料・農業・農村に関する年次報告)で「耕地利用率が」一五年ぶりに下降から上昇に転じた」と喜びの記述をしています。裏返していえば、コンマ以下の数字に「喜一憂しなればならないほど状況はきびしいということでもあります。

注 * 指標：物事の基準になる目印

(出典 大野和興『日本の農業を考える』)

つぎの木曜日には男の子に会わなかった。ねむの木の根元には煮干を撒いた形跡もなかった。夕子は持ってきたキャットフードの袋をやぶり、愛がやりたがったので、また愛にキャットフードをばら撒かせた。ふたりがねむの木のそばを(1) 離れるやいなや*ヤッホーが現れた。

月曜日。ふたりがねむの木のところに行くと、煮干が数匹落ちていた。あの子が来たんだと夕子は思った。あの子の、ひらっと笑った恥ずかしそうな笑顔を思い出した。

「おねえちゃん、これ」愛が何かを拾って、夕子に差し出した。手帳だった。中を開いてみると、住所録になっていた。裏表紙のポケットに千円札が折りたたんで挟んである。そこに住所と名前が書かれていた。もしかするとあの子が落としたのかもしれない、と思った。ここに書かれている沢田新平というのがあの子の名前なのかもしれない。きゆうに胸がどきどきしはじめた。住所は少し離れたところにある団地のものだった。

「だれの？」と愛が訊いた。「さあ、たぶん、このまえここにいたお兄ちゃんのものだと思うけど」「どうするの？」

夕子は、警察に届けることも一瞬考えたけれど、でも、きつとまたここで会えるはずだから、そのときに手渡してあげよう、そしてもしもあの子の手帳じゃなかったら、そのとき警察に届けよう、と思った。

つぎの日、火曜日だったけれど、夕子は保育園に妹を迎えに行ったその足でねむの木に向かった。

「今日も猫に餌をあげるの？」と愛は訊いた。「ちがうよ。今日は火曜日だからね。猫に餌はあげないの。手帳をお兄ちゃんに渡してあげたいからね、お兄ちゃんが来ていないかどうか見に行くだけよ」

でも、あの子は来ていなかった。ねむの木の下に煮干も落ちていなかった。しばらく待っていたけれど、あの子は現れなかった。

水曜日、ふたりはまたねむの木に向かった。でもやはり(2) あの子が来た形跡はなかった。

木曜日、猫に餌をやりかねむの木に行った。愛にキャットフードを撒かせ、しばらく待っていたけれど、でもあの子はやって来なかった。

夕子は迷っていた。いつまでも手帳を持ってちやいけない気がしていた。お金も入っているし、あの子、住所録がなくてきつと困っているだろう、と思った。

金曜日、(3) 夕子は決心をした。

いつものように保育園に愛を迎えに行くと、ねむの木のところには行かずに、まっすぐ家に帰った。いつものように鍵をあけてだれもない家に入ると、愛の肩から保育園バッグをはずさせた。それから愛のスカートを脱がせ、かわりにズボンをはかせた。

「ねえ、どうして？」と愛は訊いた。「どうしてきようは猫のところへ行かないの？お兄ちゃんの手帳はどうなったの？お兄ちゃんに渡すんじゃないの？」「お兄ちゃんは来ないからね、だから手帳を届けてあげるの」

夕子は愛を連れて、あの子の住む団地まで行くつもりだった。団地の場所はわかっていて、でも愛の手を引いて歩いて行くには遠すぎた。

夕子は愛を連れて家の外へ出ると、自転車のところへ行った。そして、愛を自転車の後ろに腰かけさせた。

「自転車で二人乗りしちやいけませんって、お母さんは言ったよ」と愛は言った。「わかってるよ。だけど歩いて行くには遠すぎるもん。いい？お母さんには内緒よ。いまから行く場所のことも、自転車の二人乗りのことも。ぜったいに言っちゃだめよ」「どうして？」

「どうしても」あの子のことは、なぜだか、だれにも知られたくなかった。わざわざ手帳を届けに行くこともだれにも知られたくなかった。あの子はいつのまにかひっそり夕子の胸に住みはじめた。たつた一度会っただけなのに、(4) あの子の顔を思い浮かべるとそれだけで、胸がどきどきした。夕子は手帳をこっそり開いて見た。二十人ぶんの住所と名前と電話番号がそこに書かれていた。知っている人の名はなかった。それはあの子の文字で書かれていた。夕子は何度も手帳を開いた。(5) あの子と親しくなったような気がした。

(6) すぐに出かければ、お母さんが帰ってくる七時までには楽に行って帰れるはずだった。

「わかった？」と夕子は念を押した。「わかった」と愛は返事した。「じゃあ、しっかりつかまってるのよ」「だいじょうぶ」

夕子は自転車をこぎはじめた。妹は思った以上に重かった。足に力を入れて、夕子は自転車をこいだ。

商店街は避け、バス通りへ出た。夕子はけんめいに自転車をこいだ。最初のカーブを曲がり、図書館の前を過ぎた。

「足がだるいよ」と後ろで愛が言った。「がまんしてよ」と夕子は前を向いたまま言った。団地までの距離のまだ五分の一ほどしか来ていなかった。

愛がAとペダルをこいだ。

「じつとしてよ」夕子は言った。

また愛が動いた。自転車がCと揺れ、倒れそうになった。

夕子は自転車を止めた。

「じつとしてよ。危ないじゃないの」「だってお尻が痛いもん。足もだるいもん。あたし、お留守番してるほうがよかった」「一緒に行きたいって言ったでしょ」「言っていないよ。行きたくないもん」「とにかく、がまんしてよ」

(7) 愛はむすっとした顔をして返事はしなかった。

夕子は自転車を出した。(8) なんだかさつきよりもさらにペダルは重くなったような気がした。

注 * ヤッホー：のら猫の名前

(出典 岩瀬成子『となりのこぶた』)

